

泰山木

池松 孝子

泰山木は北米原産で、日本に渡来したのは明治のころ。樹高が二十メートル以上にもなり、花びら一枚が手のひらほどもある純白で大きな花をつけ高貴な香りがその開花を告げる。マグノリアといい香水の原料にもなっている。私がこれまで見た中では京都渡月橋のそば、東京六義園のものが印象深い。梅雨空に白い大きな花はうれしい。

ゆふぐれの泰山木の白花は われのなげきをおほふがごとし 斎藤 茂吉

その日、恩師の家で数人の級友と中原中也の詩を読んでいた。師は日本文学、特に藤原定家研究の第一人者である。それまで何度も訪ねたお宅であったが、玄関に三、四箱の段ボールが無造作に置かれているのが気になった。新しく出版された書籍かとも思ったりした。いつになく重い空気の漂う中、先生はその段ボールを開けるように指示され、全員に一冊ずつ真新しい本が手渡された。

そして、先生には私達より少し年上の妹がいたこと、とても優秀で東北大学で文学の勉強を始めた事など聞いた。入学して間もなく妹さんの行方が分からなくなり、手掛かりのつかめないまま数か月が過ぎたという。しばらくして、信州の山中で妹さんと思しき遺体が見つかったとの連絡が入った。

後日、妹さんの発見された山を訪ねた時のことを話してくださいました。山道を入れていくと入り口に禅寺があった。重い足取りで歩いていると、そこに高齢の住職が出ていらっしやう。その娘さんと話しましたよ」と切り出したという。その寺に大きな木があり、白い花を見上げて香りのすばらしいよと、このじつとりとした梅雨の時期に、自然は素晴らしい贈り物をくださるなど静かに話したという。

最後に「これは何という木ですか」「泰山木といいますよ」この短い会話の後、彼女は山の方に入って行ったそうだ。玄関の本は、妹さんの短い十八年の思い出を綴ったものだった。

後にこの泰山木の花言葉を知った。それは「前途洋々、壮麗、希望に満ちている」というものだった。